巻　頭　言

人類に最大の利益をもたらしたもの

（公社）日本透析医会
副会長　鈴木正司

1999年から2000年に移行する時期のミレニアム騒ぎをご記憶の方もおられよう．コンピュータに内蔵された時計が，上手く2000年に移行してくれるか否かが大きな社会問題となった騒ぎである．当時の透析室長であった私は，透析技師長とともに1999年の大晦日には病院に詰めて，夜間透析での不測の事態に備えることになっていた．当然ながら，機械・装置メーカーでは「これで万全なはずである」とは言っていたが……．だれも経験したことのない事態なので，お互いに信用していなかったのである．結果的には透析室でも，国際便の航空機でも「何も起こらなかった」のであった．

かくのごとく，現在の社会はコンピュータ無しではとても機能しない状況になっている．わずか16年前の社会であっても，すでに交通機関の運行制御，座席の予約チケット販売などはコンピュータで行われていた．なによりも，我々の業務で日常的に使用する透析装置にも，すでに「マイコン搭載」が謳い文句のように宣伝・強調されていた．さらに一部の先進的施設では「電子カルテ」が導入されつつあったが，老朽化した我々の施設では未だ「電子カルテ」は採用されておらず，近く予定されていた新築・移転時には，全館で電子化され，医師の指示の発注・記録までが「電子化」され，レントゲン撮影・CTなどの画像まで「電子化」されて紙もフィルムも存在しなくなる（paperless）と宣伝されていた．

その2000年騒動が落ち着いた8月初めに，我が家に雌の柴犬がやって来た．実はこれは2代目の柴犬であり，前の犬も14年生存したが，乳がん手術も受けて，結局はフィラリア症で心臓弁膜症を患いながら認知症も出て，最後はヨレヨレで往生した．世の「バカ親」と変わらず，「うちの犬ほど利口で，家族の気持ちを理解する犬はいない」と言うべき「賢い犬」であった．しかしさすがの2代目の「賢い犬」も，昨年10月半ばに，満15歳を過ぎて大往生を遂げた．しかしこの度の死因は，フィラリア症ではなかった．実は，以前には犬の直接死因はほとんどが「フィラリア症」であったようである．しかし最近のペットは「フィラリア症」で往生することは極めて珍しくなった．もちろん野良犬・野良猫は別であるが……．

さて話は変わるが，昨年秋のノーベル賞の2人の日本人受賞者の内のお1人は，医学・生理学賞の大村智先生であったことはご存じの通りであろう．かの大村先生は静岡県伊東市のゴルフ場近くの土壌から新種の放線菌を発見し，その生成物が米国製薬大手のメルク社との共同研究で，動物の寄生虫症に有効であると判明した．「エバーメクチン」の発見であった．その後，構造の一部を変えた「イベルメクチン」が合成され，寄生虫や昆虫などの神経に作用して，高い駆除率と良好な効果が得られた．

今回のノーベル賞の受賞理由は，アフリカや中南米の風土病とも考えられた「オンコセルカ症」

という，糸状の微少な線虫がブユに刺されることで感染し，皮膚や目に侵入して失明に至る疾患（河川盲目症）をほぼ撲滅できたことに対して，「人類に最大の利益をもたらした好例」と評価されたことによる．

この薬物は，実は私の2代目の飼い犬の「大往生」も恩恵を受けていたのであった．飼育を始めた最初の夏から，獣医に必ず受診し「ある薬」を毎月1回服用させるように指示されていたのである．何気なく見た錠剤のアルミシートには「イベルメクチン」と記載されていたのである．当初はまったく関心が無かったが，老犬も次第に老化が顕著となったものの，「フィラリア症」はまったく発症せずに大往生を遂げた．飼い犬の死と大村先生のノーベル賞受賞決定はほぼ同じ頃であったが，テレビ・ラジオ・新聞の報道から「イベルメクチン」の言葉を聞いて改めて死んだ犬が飲み残した薬を見たら，間違いなくあの「イベルメクチン」であった．ここで改めて大村先生の偉大な業績を実感させて頂くことになった．

このように大村先生は，人類に対して素晴らしい発見をなされたが，振り返って見ると，かつては「不治の病」とされた尿毒症も，現在ではそれで死ぬことが無くなった．そのこと自体も「人類に最大の利益をもたらした好例」であろうと思われる．しかしこの分野ではKolffもMerrillもノーベル賞の対象とならなかった．残念なことではある……と思うのは考え過ぎだろうか．